

男の子四人の働く母ちゃんのつぶやき ～家族と仕事、抑えられない想いの狭間で～

(第3回)

～仕事と子育てのワークライフ・アンバランスの苦悩～ (子連れ研究者としての在米生活での気づきと逆カルチャーショック)

■「これが私のやりたかったこと」という頑なな思い込み

初職時代、自分が満足のできる仕事ができないのは、知識がないからだと考えた私は、退職して、大学院に進学し、博士(工学)の学位を得ました。『家庭と両立しながら専門を活かして働く女性』として生きるんだ!と、不安の中にも希望に満ちて大学助手の職に就きました。出身大学院機械工学専攻博士後期課程修了の日本人女性第一号であった私は、着任学科の日本人女性教員第一号でもありました※。加えて、外部資金(文部科学省科学研究費補助金)を獲得していたことも気合が入る原因の一つでした。そうでなくても、狭い視野で猪突猛進で力みがちな私は、女性研究者機械系代表のような使命感と責任感を勝手に背負い込んでいました。恐ろしく勘違いな思い込みに、なんとも呆れてしまいますが、家庭といっても夫一人。研究のためであれば、夜中に帰ろうが、職場に深夜に出かけていこうが、別に問題を感じませんでした。

※ 手元のデータでは、2003(平成15)年度、工学部全教員216名中、女性教員は4名。この内の1名が、平成27年度、当該大学工学域初の女性教授になりました。

■出産、育児、仕事との両立への挑戦

《子どもは、パワーの源とか、宝とか聞いていたのに…》

最初の出産は、大学着任1年目の10月でした。妊娠したことでアクティビティが下がったと思われるのが嫌で、気遣われれば気遣われるほど、今まで以上に頑張ろうとしました。

産前休暇に入った1週間後、元気いっぱいの子を出産。その後、自宅での新生児との生活が始まりました。妊婦向け雑誌では、かわいい赤ちゃんを抱く笑顔いっぱいのママの写真ばかりだったのに、「我が家にやってきた赤ちゃんは、とにかく心配の種!」というのが、育て始めての私の感想でした。独りで赤ちゃんと一緒に居る時間は私には責任重大で怖すぎました。生きているかどうか、ティッシュを細く切って鼻先に垂らしてみたり、2g単位の体重計もレンタルして、母乳摂取量や体重の変化をグラフ化したりしていました。今思うと、赤ちゃんを育てているというよりも、生命を維持することの責任を果たすことに一生懸命な毎日でした。

その後、生後4カ月の子どもを保育園に預けて職場復帰。別れ際に切なさに泣けて来る一方で、「発熱のため迎えに来て下さい」との保育園からの電話に、『仕事へ差し支える』と不機嫌になってしまう未熟な母でした。

《 仕事と家庭の両立の間違った努力による苦悩 》

両立という意味では、破たんに近い状態でした。子どもが生まれても、仕事の仕方を変えないし、アクティビティも下げたくない、その上、困っていると伝えることは弱みを見せることという考え方で、ただひたすらに研究のアクティビティの維持に向けての努力を続けました。週に2、3回はベビーシッターさんをお願いして夜遅くまで研究をしました。育児についても、思いこんだ頑なな姿勢は同じでした。働いているからと手抜きはしたくない。手抜きというのは楽をすることだから、楽なことはしない。オムツは布、離乳食は作り立てのものを。缶詰、レトルトもダメ。極端な精神状態にあったと思います。

夫はとても協力的で理解もあったけれど、彼もまた、家庭と仕事の板挟みになっていました。家庭内は男女協働参画が徹底しているのに、職場は必ずしもそうではない。私が職住近接にした分、夫は50kmを毎日車で通勤しました。夫のおおらかさがなかったら乗り切れなかったと思います。感謝。

仕事と家庭(というよりも育児)との両立は心身ともに苦しいものでした。能力の足りない分を努力でカバーしようとしても満足できるレベルに届かない。育児にも研究にも費やす時間を増やすことで状況の改善を期待しても達成感ゼロ。1歳の誕生日に、いつもより張り切って準備した食事を息子に全部払い落とされて、泣きながら捨てたこともありました。子どもはかわいいのに、仕事モードになると違って見える。そういう自分は母性がない冷酷な人間なのだと思います。家でも、隙あらば仕事をしようとして。すぐ起きてしまう我が子を背中や膝に抱えながら、コンピュータに向かいました。深夜に学生から、プログラムが動かないと連絡があれば、寝ている子どもをそっとベビーシートに載せて大学に向かったものでした。仕事の仕方を変えなかったのではない、変えるのが怖かったのです。ワークライフバランス(WLB)の言葉も知らず「両立する＝両方とも立てる」と解釈し、既に泥沼にはまっているのに、それを見せない努力をしていました。初職を辞めてまで求め、獲得した「納得のいく、やりがいのある仕事」を続けながら、家庭・育児をするという今やっていることは、私が望んでいた事なんだ、努力すればきっといつかできるようになるはずだと信じようとしていました。

■在外研究員として家族で渡米、第二子出産、そして、両立への挑戦

《 アメリカでの育児で気づいた、自分の気持ち 》

大学に着任した3年目の1999年に、2歳の長男と、偶然にも同じく在外研究員となった夫と共に、国費在外研究員として、一年間アメリカ東海岸のロードアイランド州へ渡るチャンスを得ました。これは、人生の大きな転機となりました。アメリカの大学の研究者の日常、仕事の仕方、すべてに驚きました。素晴らしい業績を上げているのに、疲労オーラがなく幸せそうでした。子どもを育てること、家庭、プライベートを、自然体でやっていました。やりたい研究ができて、デイケアセンター(保育園)に明るいうちに夫婦揃って息子を迎えに行ける日常、精神的にも時間的にもゆとりのあるアメリカでの生活は、望ましい自分達の暮らし方、親子・夫婦の関係を考える機会になりました。日本にいた時も幸せだとは感じてはいましたが、それは、「無理をしてでも弱みは見せない」を善しとして働き、家庭と仕事を両立させるための過度の頑張りの上に成り立っていたと気づきました。仕事をやめて大学院に行きたいと申し出た時、立ちほだかった「日本の常識」に、私自身も縛られていたのです。

半年後、アメリカの地で2人目の子を出産しました。この子が、生後2週間で、RSウイルスによる呼吸器の感染症にかかってしまいました。4%の新生児が死亡すると告げられ、「体力を消

耗するので呼吸を止めます」と言われた時は、それが、「人工呼吸に切り替えます」という意味と分からずパニックになりました。医師の言葉を、つど都度、友人が平易な英語に訳し直して伝えてくれました。息子は、新生児ICUに入り、後に一般病棟に移されました。この次男の大きな病気によって、私の価値観が自分の思っているところだけにあるわけではないのだということに気づきました。自分にとって何が大切なのか、どういう状態が幸せなのかを知りました。

《 帰国後の、日本文化に対する逆カルチャーショック 》

3歳と9か月の子供二人を連れて1年後に日本に帰ってきた私は、以前とは別人でした。アメリカでの家族の暮らしを日本でも続けたいと思いました。帰宅時間も保育園が終わるまでに早め、ベビーシッターさんをお願いする回数も減らしました。搾乳ポンプの携帯バッグを大学に持ち込み、女性職員の更衣室で搾乳&冷凍しました。夜まで仕事が必要な時も、一旦帰宅して食事をしてから、子供と一緒に研究室に行き、学生と議論しました。私の現状を学生たちが見ることで、後にパートナーと共に考える人になってくれればよいと思いました。週末にまとめて冷凍の作り置きをし、外出時の瓶詰ベビーフード、帰りに買った惣菜の晩御飯も忙しい時は仕方ないさと思えるようになりました。精神的にとっても楽になり、帰宅後の子どもとの時間を楽しむことが増えました。

帰国後、一番辛かったのは、親であることに対する日本文化への逆カルチャーショックでした。アメリカでは、友人が「たまには二人で映画でも行っておいで」と言って、子どもを預かってくれたりしました。暮らしやすさのためのサービスも沢山あって、ドライブスルーで薬を受け取れるし、足が不自由な友人の母は、毎週へアカットの人に来てもらって、美しくセットしてもらっていました。買い物や散歩に行けば、知らない者同士も、通りすがりに話したり、子どもも見知らぬ人にも笑顔で声をかけてもらったり、会話を楽しんだりしていました。アメリカでのそのような文化が、私を、親として人としての自然体の姿に立ち帰らせてくれました。「そのままでもいいんだよ」と大切に育ててくれたのだと思います。

ところが、母国に帰国後しばらくは、道ゆく人たちが怖い顔で歩いているように見えました。レストランに行くと、笑顔で話しかけられる代わりに、テーブルを汚しながら食べる子どもと親への無言の視線を感じました。そして、私にアメリカのままで居られないとハッキリと分かったのは、実の母でした。ある日、長男と夫と三人で出かけようと、実家の母に下の赤ちゃんを預けようしました。母は「小さな子がいる母親が遊びに行くとは何事。母親は自分のしたいことは我慢して子供を育てるものだ」と叱責しました。救いだったのは、夫は私以上に、私の価値観を理解してくれていたことです。「もう辞めようか」と弱音を吐く私に「辞めたらもっと辛いよ」と言ってくれる夫でした。こんなエピソードがあります。ある時、東京の大学で開催された学会に、夫婦で子連れ参加しました。一方がセッションに参加している間は、他方がキャンパス内で子供を世話しました。私の方のセッションが長引いてしまい、直後のセッションの司会役で遅れられないはずの夫を探して、走って彼の会場へ。見つけたのは、ベビーカーを押しながら講義棟廊下を歩く夫の後ろ姿。その自然な様子に、この人すごいなと思いました。教室前で彼からベビーカーを受け取り、彼は無事に単独会場入り。ただ、焦っていたため、彼はリュックを背負ったまま司会をしてしまったそうです。親も子どもみんなでもっとハッピーに暮らしたい。でも、そのためにどうしたらいいかが分からない私でありました。

